蓄音機の吹込を見る記

十月二十四日火曜日,かねて頼み置きたる三光堂の蓄音機吹込の實況を見る。或は家庭の娯樂に或は店頭の廣告に俗人の耳になれたるあの聲はそもいかにして記さるゝか。

案内されて入れば階上の一室方丈とやいはん狹苦しきこと限りなし,室の一方に幅二尺許の板敷を殘して高さ三尺許の臺あり,今しも三味に合はせて浪花節か何かを唸り居る樣怪しくも可笑し。室に入る前案内の店員我等に告げて言ふやう,可笑しくとも何卒御笑ひ下さるな少しの御聲もレコードに殘り候と。室の内暗けれど眼少しく慣れてよく見れば,浪花節かたりは「あばた」の男にて,斑白の天神鬚いとふさはし。三味をひけるは盲目の女なり,年頃四十にもやあらん,折々エオー,ヒヨーと黄色い聲もて拍子を取るに,一同笑をのんで謹聽し居たり。各大喇叭の前に座りて演ずる後より十五六の娘が團扇もて二人を煽ぎ居たり,いかなる人の子にやあらん。

一回終るを待ちて隣りの室に入れば,前に見たる大喇叭が壁を貫ぬきてこの室に入り,その端に振動膜を裝へたり。

膜より出でたる錐の光端もてその下に回轉する蠟の

圓板に振動を記すこと普通の蓄音機に見るが如し。蠟の板は厚さ一吋もあらんか,軟かにせざれば振動の充分に深く刻まれざる由にて,この機械室には石油ストーブを燃きたれば,盛夏三伏の暑さに技師は上着をぬぎて働き居たり,其の人の話に若し誤りて冷たき風のこの室に入り來ることあれば,蠟板立所に割れて廢物となるといへり。

かくして一旦聲の振動波形を刻みたる蠟板は之を電槽に入れ,銅メッキをなして凹凸反對なる銅版を作り,印刷術に於ると同樣にして之より幾枚も同じレコードを作るものなりとぞ。〔以下略す〕〔講演者に代りて之を記す〕

論說

國字改良と横書との關係を論ず

理科會部長 乙部孝吉

現在の若き國民が漢字を學ぶために無益に腦力を費しつゝあることは,識者の間に既に定論あり,今更之を說く必要なきが如しと雖,一見不可思議に堪へざる事實は,世の實際國民教育にあたる人々が,如何にして生徒に漢字を學ばしむべきかといふことに就て苦心しつゝあ